

はぐくむ まなぶ

☎026-236-3143 ✉kurashi@shinmai.co.jp

保育の現場進むICT化

園児の登降園記録や給食費集めなど

県内の保育施設で、情報通信技術（ICT）の導入が急速に進んでいる。園児の登園や降園の記録を機械化するだけでなく、保護者のスマートフォンに専用アプリを入れて園と家庭のやりとりも簡便に。保育士の勤務といった業務管理を含めてシステムで一元化する一方で、事務作業の負担を軽減する一助となっている。感染の波がやまない新型コロナウイルス対策としても人との接触を減らす上でメリットは大きいようだ。

（中村 真希子）

事務作業負担減

感染防止策にも

今年1日午後、長野市安茂里の小市保育園。お昼寝する園児の傍ら、タブレット端末を操作する保育士の姿があった。子どもたちのその日の園での様子を保護者に知らせるため、スマートフォンに音声配信する写真を選び、文章を打ち込む。保育士の一人は「子どもたちの様子が写真も見られてより分かりやすくなった」と話す。

私立の同園は、5年前から独自にICT化を進めてき

た。登降園の時刻は、保護者が専用カードを読み取り機にかざすことで自動で記録。園児約100人分の給食費や延長保育料などは保育士が計算し現金で集めていたが、2019年秋から採用したシステム「ドモン」では自動集計できて口座振替に。各家庭へのお知らせの配信やアンケート、園児台帳の記入、職員の出退勤やシフト管理など同システムで10余りの機能を使う。希望者は紙のお知らせ

の配布も続けている。導入当初、保育士からは操作の不安に加え、お便りなどは「手書きがいい」と、ツブナログの温かみを支持する声も出たという。元システムエンジニアの佐々木徹英園長は、園児や保護者との関係性を損なうことなく「保育士がやらなくていい仕事から改善を試みた」と振り返る。

情報が集約されて職員が共有しやすくなった方、「システムに全て頼るものではない」と佐々木園長。子どもの体調確認など安全面への配慮

は従来通り重視しつつ「保育士がより保育に集中できるようになった」と心えを感じている。市町村単位での導入事例も増えてきた。松本市は19年度から2年かけて公立42園にタブレット端末を配した。採用したシステム「キッズビュー」は登降園の記録、クラス便りなどの配信のほか、身体測定の結果を保護者がスマホで確認できる。

このうち波田地区にある「みづは保育園」の園児数は市内最多の約240人。導入前は朝、欠席の電話連絡が集団して対応に時間がかかったが、スマホからの連絡が定着した。年長児の母親は「最初は面倒に思っただけで、子どもの成長データも分かるし、休む時に電話する手間が省ける」と好意的に受け止める。

手書き、手集計だった出席簿が自動化されるなど保育士の負担も減った。宮沢かつ恵園長は「最初は不安もあったが、研修を重ねて今は問題な



保護者に配信している活動記録は写真付きで好評。紙に印刷して配る手間も省ける。小市保育園

園児の写真や活動内容を端末に入力する保育士。保護者が毎日スマホで見られるようにしている。長野市の小市保育園



く使えている」と話す。

◇ 県ごとも、家庭課によると、ICT導入に関する優秀省の補助金の利用件数は、16・20年度で県内13市町村の109園に上る。19年度補正予算から公立園も対象。導入が広がる背景には、県内でも待機児童が生じており、保育士の負担を軽減して人材確保につなげる狙いがある。

長野市保育、幼稚園課によると、市内の私立保育園41園のうち昨年度末までに少なくとも22園が導入。本年度中に公立28園に計330台の端末を配し、システムを導入する計画だ。同課の担当者「本来の保育業務にあてる時間を確保したい」と語る。

長引くコロナ禍下で、導入メリットもある。小市保育園は昨年、写真を保護者がスマホで注文し、自宅に配送される機能も使い始めた。それまでは園内に掲示し、保護者が選んでいたが、代金を入れた封筒のやりとりもなくなり、結果的に接触や密になる機会を減らせた。発表会や参観日の様子を家庭で見られるように配信。遠方の祖父母も利用している。